



巻頭言

「基本に戻れ」

(財)日本植物調節剤研究協会 専務理事 小澤 啓 男

小説や対話の中では、あいまいな表現が幅をきかすことがままある。ストレートに書いたり言うよりは感情的にも良いし、お互いの関係が和やかになり、かえって温かみも伝わるからである。しかし、重要な意志や真実を伝える時、あるいは適切な技術指導の時にはどうだろうか。あいまいな表現は誤解を招き易いし、過ぎて伝わることも多い。たとえば早く誤りに気が付いたとしても、軌道修正や曲がり道を余儀なくされることになる。

スポーツの世界ではよく「基本に戻れ」の科白を良く見たり聞いたりする。しかし、基礎とか基本のないものに言っても意味がないのではないか。「当然理解しているものと思った」というのでは適切な指導にはならない。良き指導書たれ、を編集テーマにした「暮らしの手帖」の故花森氏の「言葉はこちらの考えを伝える道具なのだ、気取った文章やあいまいな言葉を使うな」との気持ちは良くわかる気がする。

かつて、「農は国の礎」。コメは「命の母」と言われたが、いまは内外から変貌せざるを得ない状況である。ウルグアイラウンド農業合意で、ミニム・アクセスが決定、昨年からの米の輸入が始まった。国内の米の消費も減少の方向で、農家の消費量はともかく、一般消費世帯では外食・弁当・出前を加えて昨年の十月から十二月、月平均一人5.3kgと報告されている。また、農業センサスの結果、農家戸数は350万戸を割り、四人に一人は65才以上と言うことになっている。このような状況の中で、米の生産コスト低減、省力化は避けて通れない。

雑草との戦いでもあった米の栽培で、雑草に片を付けた除草剤、散布すれば雑草は防除できる。特に管理の良い水田ではその後、雑草のことは全く考えなくて済む。除草剤の果たした貢

献度は計り知れない。ところが、昨今雑草の発生が極めて少なくなった水田の話を耳にする。たとえ、発生診断の難しさはあるにしても、除草剤の使用は、果たして適切なものだろうか、水田に雑草が発生しないという結果だけに満足し切っていないだろうか。省力性を維持しながら低コスト化を真剣に考えなければいけない時を迎えて、「除草剤を使い始めた頃の気持ちに戻る」が必要なのではないか。農業の真似事はできても、真の百姓には一朝一夕では成れない。米作りは種子を蒔いて、気象にあらゆる気を配りながら、半年がかりで収穫する。自然現象の恐ろしさや、雑草の不始末の結果がもたらす怖さは十分過ぎる程に熟知した人々である。今こそ、いや今だからこそ、米作りの基礎を、基本を知っている人々が、無駄のない除草剤使用に徹して欲しいと願うところである。

水田除草剤は近々3キロ剤が1キロ剤に替わる。また、フロアブル剤の普及も急速に広がる傾向にあり、その先はジャンボ剤などの投げこみ剤に大きく変わるものと思われる。これを機に、「全ての雑草に有効なものから、防除を必要とする雑草に効くもの」への選択に転換する勇気を持ってもらいたい。

「環境に優しい云々」などと格好いい表現は別として、農家にはあいまいな、気取った言い回しは通用しない。日本農業の誇り『米作り』を存続させるために、除草剤の開発・普及に携わる者の使命は、手軽に処理でき、しかもできるだけ低コストな除草剤を一つでも多く早く提供し、状況に合わせて適切に使用する具体的な技術の伝達・普及を図ることであろう。それが初心に戻って、除草剤を更に大切に扱う第一歩となるのではないかと思うこの頃である。